現地校交流から国際教育を考える

前バハレーン日本人学校　教諭
北海道江別市立江陽中学校　教諭　佐　藤　昭　彦

キーワード：在外教育施設　バーレーン　国際交流　総合的な学習の時間

１．はじめに

私たちの住む世界は、人・物・文化・情報などが互いに行き来し、補い合い、影響し合って成り立っている。また情報化が進み、インターネットは、人と人とが繋がることを簡便化し、今や自宅や職場にいながら世界各国の人々と交流することができる。今まで以上に各国の文化や情報が得られやすく、地球の反対側で起きた出来事でもネットを通じてすぐに知ることができる。そんな現状に生きる私たちは、世界の様々な国や人々と無関係には生きられないことを理解できるのではないだろうか。世界には、様々な民族・文化・宗教・価値観などがあり、お互いに違いがあることも理解しなくてはならない。

世界各地にある日本人学校は、その都市の日本人社会の核の１つとなる一方、その国の人たちとの交流の拠点でもある。日本人学校では、そうした文化や環境の違いを活用し、国際的な視野をもったグローバルな人材の育成を目指して地域の特色を生かした学習指導の展開をしている。

２．バーレーンとバハレーン日本人学校について

バーレーンは、1971年にイギリスから独立し、公用語は、アラビア語である。国の半数以上は、外国人が占めており、英語も広く使われている。信仰されている宗教は、イスラム教であり、年間を通してラマダンなどの宗教行事やイスラム暦に合わせた政府の施策がとられている。しかし、宗教戒律は、比較的緩やかで、外国文化に対して寛容な受け入れ姿勢であり、女性の社会進出も他のアラブの国より進んでいる。

本校は、昭和59年にバーレーンの私立学校として開校した学校で、基本的に日本国内の学校とほぼ同じ内容の教育が行われ、帰国した際に児童生徒が、日本の学校にスムーズに適応できることを前提として教育している。

３．現地校との交流学習について

現地校やインターナショナルスクールとの交流も日本人学校の大きな活動の一つである。現地校に通う子どもたちと互いの文化や生活習慣を学べるように、交流活動を通して国際協調や協力の出来る児童生徒の育成を図っている。バハレーン日本人学校では、年間通していくつかの現地校との交流学習を取り組んでいる。その中で、今回は、バヤン校との交流学習を振り返り、より良い国際教育の教育活動の展開を考えていく。

⑴　バヤン校について

バヤン校は、数少ない男女共学の私立学校であり、幼稚園から高校までの一貫教育の進学校でもある。児童生徒数は、千人を超え、アラブ・イスラムの伝統を尊重しながら異文化体験も重視する国際色豊かな学校で、国際的に通用する児童生徒を育てる教育が行われている。バハレーン日本人学校とは、年に１度、互いの学校を会場として、交流学習を行っている。

⑵　2017年度交流学習について

この年は、バヤン校の１年生から６年生までの児童を本校に受け入れて交流学習を行った。バヤン校では、親日の子どもたちが多く、交流学習に訪れる児童を決めるために、日本をどれだけ知っているかのプレゼン大会を行って人選をしたという。交流会の冒頭で、そのプレゼンした際に使った資料を披露してくれたが、日本に対す

る熱い思いが伝わってきて、見ていた日本人の私たちも嬉しくなるほどだった。

交流会は、まずスナックタイムという軽食をとる時間から始まり、英語でお互いに自己紹介を行った。次に３つのグループに分かれ、「昔遊び」「相撲」「書写」を、それぞれ体験できるようにした。昔遊びは折り紙やけん玉、福笑いを準備し、相撲は土俵と力士スーツを準備し、実際に本校の児童と相撲をとった。書写はiPadで毛筆体験ができるようにアプリを準備し、硬筆体験として、プリントで平仮名を書けるようにもした。

昔遊びで人気があったのは、やはり折り紙であった。海外の方々と交流する際に、よく紹介するのが折り紙だが、どの年代にも人気があり、興味を持ってくれる。女子はツル、男子は手裏剣やかぶとに人気があり、教える担当の児童が傍について、英語で折り方をサポートしながら一緒に取り組んだ。自分の力で作り上げた作品を嬉しそうに引率の先生に見せ、友達同士で自分の作品を交流する場面がよく見られた。

相撲は、実際に力士スーツを身に着けて取り組めるので、男子は、とても盛り上がっていた。女子は、恥ずかしがって抵抗があった児童もいたが、いざ取り組んでみると元気よく楽しむ児童がほとんどだった。紙相撲も用意し、待っている児童が飽きないように工夫することもできた。

書写では、用意された平仮名や漢字を書くことよりも、自分の名前をどうやって平仮名や漢字で書くのかに興味を持っている児童が多く、日本人学校の児童が名前を聞いて、見本を書いてあげると喜んで真似して書いていた。自分の家族の名前もどうやって平仮名で書くのか知りたい児童や、自分の名前で使われた漢字の意味を教わり、より愛着をもって書写に取り組む児童が多かった。iPadを使った毛筆の練習は衣服を汚すことなく、準備も楽だったため、手軽に体験してもらうことができた。硬筆で練習した自分の名前を、iPadで毛筆の質感を楽しみながら取り組めていた。

交流会を通しての考察は以下のとおりである。

〇良かった点

①昔遊び、相撲、書写のどの活動も楽しんで取り組んでもらえた。

②日本人学校の子どもたちも、準備を通して日本の文化について、より深く知ることができた。

③どんな活動が海外の人に好まれるのか、どんなことを知りたいと思っているのかを、交流の中で知ることができた。

●改善したい点

①活動のサポートは、準備していたため何とかできていたが、英語で話題をつくることができず、コミュニケーションが、あまりとれていなかった。

②英語の苦手意識のある子どもは、交流すること自体に消極的で、英語が出来る子に任せてしまいがちになっていた。

③日本の文化を伝えることはできたが、相手校のことをあまり知る機会が得られなかった。

体験活動の内容は、概ね良好といえる。しかし、より深く友好関係を築くための根幹ともいえるコミュニケーションについては、課題が残った。

(3) 2018年度交流学習

現地校との交流の様子

2018年度には、バヤン校を訪問し、小グループに分かれて授業に参加させていただいた。主に小学校３～５年生のクラスと交流を行い、Jacksと呼ばれたゲームを一緒に取り組むグループ、ポタリーという陶器に色付けを行うグループ、バーレーンの伝統的な遊びを体験するグループの３つを、ローテーションを組んで活動した。Jacksというゲームは、５～７個置かれた石（ビー玉でもブロックでもなんでも良い）を手に持った石を上に投げる間に何個持てるかを競うもので、どの学年でも簡単に取り組むことができた。何人かのバヤン校の児童のグループに日本人学校の児童が１人参加し、教えてもらいながら取り組んでいた。最初は、ルールをよく分

かっていなかった子も次第にやり方がわかり、一緒にゲームを楽しんでいた。

ポタリ―の色付けでは、各々が自分の好きな色を塗るという活動だったため、あまり積極的な交流は見られなかった。しかし、色付けの際に模様として自分の名前を平仮名や漢字で書き入れたいというバヤン校の児童が多く、日本人学校の児童が相手の名前を聞いて、その名前に合った漢字や平仮名を教えてあげる場面も見られた。ただ漢字や平仮名を教えてあげることは、低学年の児童にとって難しく、自分の作品を黙々と仕上げる時間となっていた。

遊びの体験では、一緒にドミノやケーラム（ビリヤードやおはじきに似たゲーム）を取り組むことや、伝統的な衣装を着て、記念撮影をさせてもらった。衣装については、大小色とりどりのものを揃えてもらっており、参加した児童生徒全員が体験することができた。ゲームについては、一緒に取り組む児童もいれば、熱中して取り組んでいる様子を見ているだけの児童もいた。

校内を見てみると、学級の掲示物は、全て英語で作成されており、アラビア語の掲示物は、ほとんど見かけなかった。授業で使われているのも英語で、授業のルールや子どもたちの話し合い活動の際も、英語が使われていた。またGrade4の授業に少し参加した時間もあった。そこでは「ローマ帝国について調べる」という学習を行っており、まず子どもたちからその時代の調べたいことを発言させ（その時代の食事・衣類・兵器など）、その中で同じものを調べたい子たちでグループを作り、調べ学習を行っていた。板書は、下記の画像にあるようなホワイトボードに模造紙を貼ったものに書き、一度書いたものを振り返れるようにしていた。他の学級にも同様のものがあり、教室に設置されている日本でならば板書に使うであろうホワイトボードには、子どもたちへの課題がメモされており、授業を進める際には、小さなホワイトボードで進めているようであった。

調べ学習をする際には、iPadが１人１台用意されており、それを使って自主的に課題を進めていた。日本人学校の児童も参加させてもらったが、会話や調べ学習に出てくる単語の難解さや、iPadを使って、英語で自分の知りたい情報を得るための方法がよくわからず、授業についていくことはできなかった。その授業についていけず困っていることについてもうまく伝えられず、コミュニケーションをとることもままならなかった。語学の習得の必要不可欠さを身にしみて感じた場面である。

校内の掲示物の様子

2018年度の交流会の考察としては、以下のとおりである。

〇良かった点

①体験的な学習が多く、どの学年も間延びせずに交流を楽しむことができた。

②バヤン校側の受け入れの準備がしっかりしていて、日本人学校の子どもたちが、無理なく楽しめるようなプログラムが組まれていた。

③校内を見学することや、授業を参観することができ、教員側も授業の雰囲気や掲示物について学ぶことができた。

●改善したい点

①自分の好きな言葉を英語で伝えようと準備したが、多くの子どもたちがその話題を出せずに終わってしまった。英語の苦手意識が強い。

②受動的な姿勢が多く、コミュニケーションを自発的にとろうとする場面が、少ない子どもが多かった。

③バヤン校で紹介されたバーレーンの伝統的な文化について知らないことが多かった。

今回の交流会においても、コミュニケーションについて課題が残ったが、「事前に相手校のことをより深く理解しようとする試みも少なかったのではないか」という新たな課題が生まれた。

４．現地理解について

より良いコミュニケーションをするためには、互いの理解を深める必要性がある。そのため、バハレーン日本人学校では、日本の文化を知ってもらうために、現地校交流の際には、折り紙や、習字、けん玉など教えてあげ

られるように準備をしている。しかし、2回の交流会を振り返って考えてみると、バヤン校やバーレーンのことについて、どれだけのことを知った状態で交流会に臨んでいたのだろうか。もっとたくさんのことを知った状態ならば、より良いコミュニケーションができたのではないだろうかという考えから、中学部の総合的な学習の時間は「バーレーンの文化の理解を深めよう」という授業に取り組んだ。身近にいるバーレーン人の方にインタビューを行い、生活面や子どもたちの遊びなどを教わることで、今後の交流会を行うときに活用していけるようにまとめていった。

○中学部　総合的な学習の時間

「バーレーンの文化の理解を深めよう」

英会話の講師の先生、アラビア語の講師の先生、学校のドライバーの3名のバーレーン人の方にインタビューを行い、日本との違いを理解する。それが次年度の交流会や、プライベートで現地の方と交流する際のコミュニケーションを深めるためのツールとなるようにまとめを行った。中学部の生徒が特に興味をもったことはじゃんけんについてと、コトルという手遊びであった。じゃんけんについては、バーレーンであまりメジャーでないことを初めて知り、どこの国でも当たり前にあるものだという概念が覆されただけでも、今回のことを調べた価値があったように思う。じゃんけんのアラビア語バージョンや、それに代わる勝敗の決め方など下級生にも伝えられるようにまとめの活動を行い、みんなで共通理解を図るように取り組んだ。

インタビュー内容　「生活面(衣・食・住)に関することを中心に聞いてみよう！」

○1日の生活で何をしていることが多い?

（ハ）読書

（フェ）だいていは家族と過ごし、映画をみたり、テレビを見たり読書をする。

○コーランはどこで学ぶの?

（グ）家の中かモスクの中でムッラと呼ばれる人が教えてくれる。教えてくれる人は男の人も女の人もいる。

（ハ）コーランセンターやモスクで教えてもらう。

（フェ）学校やモスクで学ぶか、両親や家族の誰かから教えてもらう。

○子どもの生活として、どんな遊びをしているか？（バーレーンならではの）

（グ）自転車・ドミノ・カード・おはじき・ビー玉遊び、コトル（ジャックス）

○女の子の遊びは

（ハ）お人形遊び。

（フェ）　お人形遊びやビデオゲームなど

○男の子の遊びは

（ハ）ビデオゲームや携帯やタブレットのゲーム。サッカーや自転車が好きな子も。

（フェ）ビデオゲームや携帯やタブレットのアプリ

○じゃんけんってあるの?

（グ）じゃんけんではあまり決めない。マトゥルース　or　カーリーといってどっちの手に入っているかを当てるゲームで決める。

（ハ）カードで勝敗を決めることがある

（フェ）ある。アラビア語ではハジャール・ワラク・マガス。他にもじゃんけんに代わるものはたくさんあり、かくれんぼで決めることも。

○どんなものを食べていることが多いのか?

（グ）金曜の夜はマチブースやエビをたべる。ハムールという大きなお魚を食べることもあり、白いご飯や野菜をよく食べる。

（ハ）パン、米、果物、野菜、肉

（フェ）ビーフやチキンや魚。米は重要でランチに良く食べる。

コトルという手遊びも教えてもらったが、バヤン校でも同様の手遊びを教えてもらい、（Jacksがコトルのことであった）また、道徳の授業でパキスタンの子どもたちの資料映像の中にも同様の遊びが映されており、日本人の我々が知らないだけで、中東では有名な遊びだということもわかった。このコトルについても遊び方を学校全体でもう一度振り返り、次の交流会の際に日本の文化を交流するだけでなく、相手の知っている遊びで交流を図れることを目指している。

自国を理解するだけでなく、相手の文化も理解し、それを伝えられるようにする準備が大切なのだということが、この総合的な学習の時間のまとめとなった。相互理解の重要性は、交流会に向けたことだけでなく、もし、日本に住む人々が、海外の人々と交流するときにも通ずることなのだと私は考える。

5．まとめ

「絵を描く授業を一緒に取り組んだとき、日本の景色を描いたら、周りにいた子が日本の思い出や知っていることを話してくれた」「みんな頑張って、日本語を話してくれてうれしかった。中には、『日本語を教えて』という人もいた」など、日本人学校の子どもたちが交流会を通して得たことは、日本という国の素晴らしさと、現地の人と交流することは、難しくないことだと私は考える。平仮名・漢字など普段何気なく使っている文字にも美しさがあり、その良さを再確認できただけでも大きな意味があったと思う。このような経験を通して、子どもたちが、もっと交流したい、交流を深めるために相手を知りたい、英語をもっと勉強したいと主体的に学ぶ姿勢を育てることが、教員側に求められる。今回、バハレーン日本人学校の子どもたちは「うまく話ができない」「英語で話ができるようにならなきゃ困る」「相手の文化をよく知らない」ということを、自らの体験をもって知り、

それを解決しようと努力できる環境下にあったからこそ、自発的な学習に繋げることができた。日本に戻ってからは、Skypeなどを活用して、他国の子どもたちと身近に国際交流が出来るような実践をしてみたいと考えている。

今後、日本で、国際教育を考える際には今回の経験を活かし、広い視野を育て、異なった文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度の育成ができるよう自己研鑽に励む所存である。